

平成12年度病害虫発生予報

第4号(7月予報)

平成12年6月29日
津軽地域病害虫防除所
南部地域病害虫防除所

【概要】

- ・水稻では、葉いもち、コバネイナゴ、斑点米カメムシ類、ニカメイガが全県的に、イネカラバエが東青・西北五地域でやや多いと予想される。
- ・りんごでは、キンモンホソガが南部地域でやや多いと予想される。
- ・りんご以外の落葉果樹では、ぶどうの晚腐病が県内全域でやや多い、おうとう(晚生種)の灰星病(実腐れ)が南部地域で多いと予想される。
- ・畑作・野菜では、アブラナ科野菜のコナガがやや多いと予想される。

《発生が多くなると予想される病害虫》

おうとう(晚生種)	灰星病(実腐れ)	南部地域
-----------	----------	------

《発生がやや多くなると予想される病害虫》

水稻	葉いもち コバネイナゴ 斑点米カメムシ類 ニカメイガ ----- イネカラバエ	県内全域 東青・西北五地域
りんご	キンモンホソガ	県内全域
ぶどう	晚腐病	県内全域
アブラナ科野菜	コナガ	県内全域

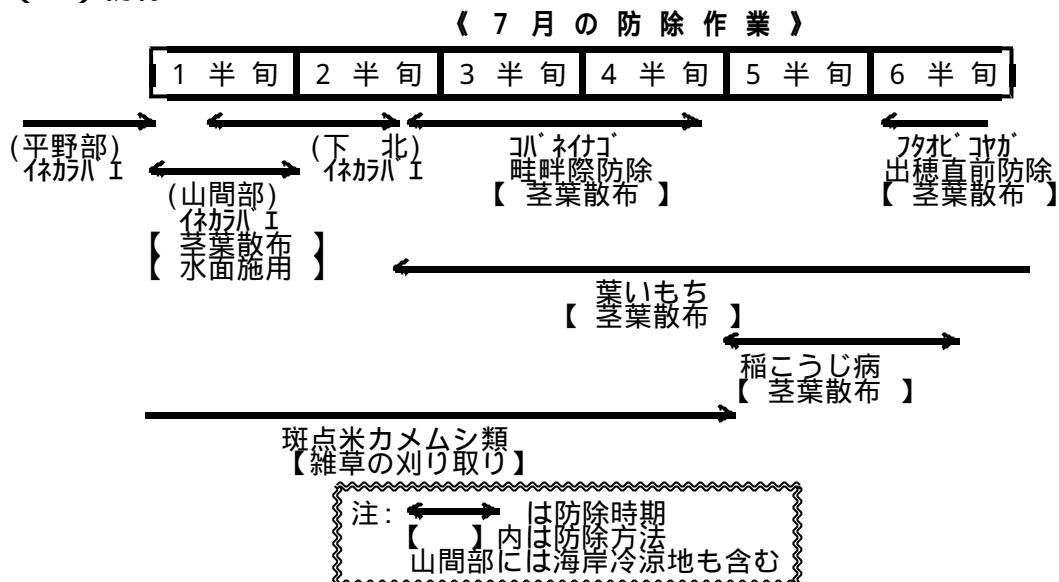
病害虫に関する問合わせ先

電話 FAX E-mail
津軽地域病害虫防除所 0172(52)9500 0172(53)3717 ts-bojo@ags.pref.aomori.jp
南部地域病害虫防除所 0176(23)4290 0176(20)1167 na-bojo@ags.pref.aomori.jp

1 水 稲

病害虫名	予 報 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発 生 量	
葉いもち	県内全域	(初発時期) やや早い 平年値: 7月8日	やや多い	7月の気温は高く、降水量が平年並の見込みである。
稻こうじ病	県内全域	-	やや少ない	前年の発生量は平年並であった。 7月は気温は高く、降水量が平年並の見込みである。
イネカラバエ	東青・西北五地域	(産卵最盛期) やや早い	やや多い	4~6月の気温が平年よりやや高く経過した。 7月の気温が平年より高い見込みである。 前年の発生量が東青・西北五地域では平年よりやや多く、その他の地域では平年並であった。
	上記以外の地域		平 年 並	
コバネイナゴ	県内全域	(ふ化終期) やや早い	やや多い	4~6月の気温が平年よりやや高く経過した。 7月の気温が平年より高い見込みである。 前年の発生量がやや多かった。
斑点米カメムシ類	県内全域	(第1世代成虫 (第2回成虫) 最盛期) やや早い	やや多い	6月の誘殺数が平年より多かった。 6月4半旬から気温が高く経過した。 7月の気温が平年より高い見込みである。
フタオビコヤガ	県内全域	(第2世代幼虫 ふ化盛期) やや早い	平 年 並	6月中旬の巡回調査における第1世代幼虫の発生は一部に多い地域もあったが、全体としては平年並であった。 4~6月の気温が平年よりやや高く経過した。 7月の気温が平年より高い見込みである。
ニカメイガ	県内全域	(産卵最盛期) やや早い	やや多い	4~6月の気温が平年よりやや高く経過した。 7月の気温が平年より高い見込みである。 6月の誘殺数がやや多い。

(1) 防除のポイント



【 葉いもち 】

初発時期は平年よりやや早いと見込まれるので、早期発見に努め、発生を認めたら直ちに薬剤を散布する。

薬剤散布1週間後においても病勢進展が止まっているようであれば、再度散布する。

補植用取置苗は発生源となることがあるので直ちに処分する。その際、補植用取置苗でいち病の発生が確認された場合にはその周辺についても発生していないかよく調べ、発生が確認された場合には茎葉散布による防除を行う。本年は津軽地域で1ヶ所、南部地域で1ヶ所、取置苗に葉いもちの発生を確認している。

窒素施肥量が多いといもち病に対する抵抗力が低下するので、適正な施肥管理を行う。

【 稲こうじ病 】

稲こうじ病は、出穂後の粉に病徵が出るが、防除の適期は穂ばらみ期であり、出穂10日～20日前に薬剤を散布する。

穂ばらみ期の低温、日照不足、多雨で発生が多くなるので、このような気象条件で前年発生の見られた水田では必ず防除する。

窒素施肥量が多いと発生が多くなる傾向があるので、適正な施肥管理を行う。

【 イネカラバエ 】

東青、西北五地域では発生量がやや多いと予想されるので、2～3日毎に産卵状況を調査し、産卵株率が80%を越えた日（産卵最盛期）に防除する。産卵状況を調査できない場合は、下表の例年の産卵最盛期を目安に適期防除に努めるが、本年はやや早くなると見込まれることから、およそ3日程度早めとする。

イネカラバエに対する茎葉散布の防除効果は、防除適期である産卵最盛期を失すると著しく低下するので散布時期に注意する。

昨年、傷穂の発生が多かった地域では、防除適期の幅が広く（産卵最盛期～10日後）効果が高いジメトエート粒剤を10a当たり2kg水面施用して防除する。

<例年の地帯別産卵最盛期>

地 帯	産卵最盛期
平野地帯	6月30日前後
山間・海岸冷涼地帯	7月5日前後
下北地域	7月10日前後

【 コバネイナゴ 】

出穂期前後の薬剤散布の際に本種にも効果の高い殺虫剤を含む殺虫・殺菌混合剤を散布し、他病害虫と同時防除する。

7月2～4旬のふ化終期に防除する場合は、畦畔（農道、水路の雑草も含む）及び水田の畦畔際2～3mに薬剤を散布する。

【 斑点米カメムシ類 】

カメムシ類の生息密度を低下させるためには発生地となる農耕地以外の雑草の刈り取りが特に重要になる。

草刈りの時期としては6月下旬から7月中旬にかけて行い、遅くとも水稻の出穂2週間前までに終える。出穂期間近の草刈りは、逆にカメムシ類を水田に追い立てことになるので注意する。

ヒ工類の発生田ではカメムシ類が誘引されて、斑点米の発生率が著しく高まるので、ヒ工類の防除を徹底する。

【 その他の病害虫 】

フタオビコヤガの発生が例年多いほ場では、県農作物病害虫防除基準に準じて適期防除に努める。本年は発生時期がやや早くなる見込みであり、防除適期は7月上旬である。

ばか苗病の発生は一部に発生の多い地域もあるので、徒長あるいは枯死した罹病株がみられる場合は、罹病株を出穂前に抜取り、土中に埋めるか焼却して、出穂後の幼虫への感染を防止する。

長距離移動性害虫であるセジロウンカ、コブノメイガの飛来時期は、例年、7月中旬以降であり、今のところ発生時期、発生量の予測はできないが、今後、発表される予察情報に注意し、適期防除に努める。

イネハモグリバエ第2世代幼虫の発生は、全般に少ない見込みであり、ほとんどの地域で防除は不要と思われるが、例年発生の多い地帯では、県農作物病害虫防除基準に準じて適期防除に努める。

ニカメイガは、近年の発生状況から、本種単独の防除が必要となるほ場はきわめて少ないと思われる。しかし、局地的には被害程度の高い地点がみられ、それら地点ではやや増加する傾向もみられる。したがって、前年の発生が目立ったほ場では、出穂10日前に連続50株5か所程度を調査し、被害株率が4%以上の場合には、出穂10日前と出穂初め～出穂期の2回防除する。被害株率が4%未満の場合には、出穂初め～出穂期に1回、他病害虫と同時防除する。

（2）防除上注意すべき事項

当該ほ場の防除対象となる病害虫を見極め、同時防除により効率化をはかる。

粒剤を水面施用した場合は、散布後4～5日間は水を流さないようにする。

いもち病が多発して、散布回数が多くなり、散布間隔も5日ごと位に短くする場合には次の点に注意する。

同一薬剤を連用すると、耐性菌の発生する恐れがある。また、同一農薬の散布間隔は、作物への農薬残留の点から7日以上としなければならない。したがって、異なる薬剤を組み合わせて防除する。

稻こうじ病対象のカスミンボルドー、カスミンボルドー粉剤3DL、ラブサイドベフラン粉剤DLは葉いもちを同時防除できるが、穂いもちの防除は出穂期前後に必ず実施する。また、出穂10日前以降の銅剤散布は、薬害の恐れがあるので散布時期を厳守する。

2 りんご

病害虫名	予 報 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発 生 量	
斑点落葉病	県内全域	-	平 年 並	6月の発生量が平年並であった。 7月の降水量が平年並の見込みである。
リンゴコカクモンハマキ	県内全域	やや遅い (第1世代 羽化最盛期)	少 な い	フェロモントラップへの誘殺時期がやや遅い。 越冬世代発生量が少なかつた。
リンゴモンハマキ	南部地域	やや遅い (第1世代 羽化最盛期)	少 な い	フェロモントラップによる成虫の誘殺時期が平年よりやや遅かった。 越冬世代の発生量が少なかつた。
キンモンホソガ	津軽地域	平 年 並 (第2世代成虫 発生時期)	やや少ない	第1世代成虫の発生時期が平年並であった。 6月の発生量がやや少なかつた。
	南部地域		やや多い	第1世代成虫の発生時期が平年並であった。 6月の発生量がやや多かつた。
リンゴハダニ	県内全域	やや早い (増加期)	平 年 並	7月の気温が高い見込みである。 6月の発生量が平年並であった。
ナミハダニ	県内全域	やや早い (増加期)	平 年 並	7月の気温が高い見込みである。 6月の発生量が平年並であった。

* その他の病害虫：モモシンクイガは平年並に少ない見込みである。

(1) 防除のポイント

【 斑点落葉病 】

不要な徒長枝は早めに切り取る。

7月上旬に有機銅水和剤、ジラム・チラム剤、アントラコール顆粒水和剤、プラウ水和剤、ユニックスZ水和剤のいずれかを散布する。7月中旬に有機銅水和剤、キャプタン・有機銅剤、アントラコール顆粒水和剤のいずれかを散布する。7月下旬に有機銅水和剤、キャプタン・有機銅剤、アリエッティC水和剤のいずれかを散布する。

急増の恐れがある場合は、基準薬剤にポリオキシンA L水和剤又はロブラール水和剤を加用する。

ポリオキシンA L水和剤、ロブラール水和剤は薬剤耐性の心配があるので、7月中旬まではできるだけ使用しないようにするとともに同一薬剤の連続散布は避ける。

アリエッティC水和剤とカネマイトフロアブルを混用する場合は、アリエッティC水和剤を最後に加用する。

【 褐斑病 】

前年に発生が多かった園地では、7月下旬の基準薬剤にトップジンM水和剤1,500倍又はベンレート水和剤3,000倍を加用する。これらの薬剤は耐性菌の生じる懸念があるので、本病を対象にした防除ではどちらか一薬剤を選び年一回の使用にとどめる。

【 ハマキムシ類 】

7月上旬(1~2日)にダーズバン水和剤、又はピレスロイド剤を散布する。この場合ピレスロイド剤の散布によりキンモンホソガ、モモシンクイガ等の同時防除ができ、次の殺虫剤も省略できる。

【 キンモンホソガ 】

7月下旬に硫酸ニコチン液剤、デミリン水和剤、アドマイヤー水和剤、モスピラン水溶剤のいずれかを散布する。この時期にピレスロイド剤を使用した場合は次回8月上旬のハマキムシ防除剤を省略できる。

【 クワコナカイガラムシ 】

発生の多い所では、越冬世代成虫の産卵前(6月下旬)にバンドを巻き付け、第1世代卵のふ化前(7月中旬)に取り外す。

発生の多い場合は7月下旬および8月上旬に防除剤による胴木洗いを手散布で実施する。

成虫は大枝の切り口や木の空洞部周辺に集まるのでブラシなどでつぶす。

【 ハダニ類 】

発生状況に応じて適宜ダニ剤を加用する。散布の目安は、園地全体で1葉当たり寄生成虫数が2個体以上あるいは寄生葉率50%以上である。

ダニ剤は薬剤抵抗性が出やすいので同一薬剤の連続散布は避け、できるだけ年1回の使用にとどめる。

オマイト水和剤は7月末までの使用を避ける。

根ばえと大枝から発生している徒長枝は増殖源となるので早めに取る。

3 りんご以外の落葉果樹

病害虫名	予報内容			予報の根拠
	発生地域	発生時期	発生量	
(ぶどう) 晩腐病	県内全域	-	やや多い	前年の発生量がやや多かった。 7月の降水量は平年並の見込みである。
(ぶどう) 褐斑病	県内全域	-	平年並	前年の発生量は平年並であった。 7月の降水量は平年並の見込みである。
(おうとう:晩生種) 灰星病(実腐れ)	南部地域	-	多い	花腐れの発生が多かった。 中生種で実腐れの発生が多かった。

(1) 防除のポイント

ぶどう

【 晩腐病、褐斑病 】

7月中旬(大豆粒大)にサニパー水和剤、ジマンダイセン水和剤、アミスター10フロアブル、ストロビードライフロアブルのいずれかを散布する。

スチューベンで晩腐病の発生が多い園地では、7月上旬にビスダイセン水和剤を特別散布する。

おうとう
【 灰星病 】

南陽、サミット、ナポレオン等の晩生種では、収穫7日前頃にラリー水和剤又はルビゲン水和剤のいずれかを散布する。

収穫前にロブラー・ルフロアブルを散布する。

4 畑作・野菜

病害虫名	予報内容			予報の根拠
	発生地域	発生時期	発生量	
(じゃがいも) 疫病	県内全域	やや遅い	平年並	6月下旬の巡回調査では、発生は認められていない。 7月の降水量が平年並の見込みである。
(きゅうり) べと病	県内全域	-	平年並	7月の気温は高く、降水量が平年並の見込みである。
(すいか) つる枯病	県内全域	-	平年並	7月の降水量が平年並の見込みである。
(メロン) つる枯病	県内全域	-	平年並	7月の降水量が平年並の見込みである。
(アブラナ科野菜) ヨトウガ	県内全域	-	平年並	越冬世代成虫及び第1世代卵塊の発生量は、平年並である。
(アブラナ科野菜) コナガ	県内全域	-	やや多い	6月の成虫及び幼虫発生量は、平年並～やや多く推移している。 7月の気温は高く、降水量が平年並の見込みである。

(1) 防除のポイント

じゃがいも

【 疫病 】

平均気温15以上で雨が2～3日続くと発生し始め、20前後で曇天多湿な天候が続く場合に蔓延する。

発生が認められた場合には、5～7日以内の散布間隔で防除を行い、蔓延を防止する。

きゅうり

【 べと病 】

気温が20前後で多湿、肥料切れの時に発生しやすい。

敷わらを早めに行い、雨滴の飛散を防ぐ。

発病初期から5～7日毎に、下葉や葉裏にも十分付着するように薬剤散布する。発病が激しい時は3日毎に散布する。

すいか、メロン

【 つる枯病 】

連作されている畑や、雨続きで湿度が高い状態が続くと発生が多くなるので注意する。

発生が見られたら、5～7日おきに防除薬剤を散布する。

アブラナ科野菜
【 ヨトウガ、コナガ 】
生育初期に発生すると被害が大きいので、定植時の薬剤防除を徹底する。
ヨトウガ及びコナガとも、老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るので、若齢幼虫のうちに防除する。
コナガは殺虫剤に対する抵抗性がつきやすいので、同一系統の薬剤を連用しない。

- 青森県農薬危害防止運動を実施中 -

運動実施期間 平成12年6月15日～8月14日

〔 農薬を使用する場合は、使用基準を守り、農薬による事故を無くしましょう。また、病害虫の発生予察情報等を参考にしながら、必要最小限の農薬を使用し、環境にやさしい農業を推進しましょう。 〕

農薬散布に当たっては、次の事項に注意しましょう。

散 布 前

農薬の容器には、使用方法、使用上の注意などが書かれているので、使用前にラベルを良く読む。

事前に、防除機等を点検整備する。

農薬用マスク、保護メガネ、手袋等の防護具を着用する。

過労や体調が優れない場合は作業をしない。

河川や水道水源等の汚染防止、居住者・通行人・家畜等に被害を及ぼさないよう十分配慮する。

散 布 時

散布作業は、風の強くない、朝夕の涼しい時間を使い、2～3時間ごとに交替して行う。

風下からの散布、水稻の病害虫防除の際の動力散粉機（多孔ホース噴頭）の中持ち等はやめ、農薬を浴びることのないように十分に注意する。

土壤くん蒸剤を使用する場合は、薬剤が揮散し周辺に影響を与えないよう風向きなどに十分注意し、被覆を完全に行う。

農薬の散布によってめまいや頭痛が生じ、又は気分が少しでも悪くなった場合には、医師の診断を受けること。

散 布 後

作業後は、手足はもちろん全身を石けんでよく洗うとともに、眼を水洗し、衣服を取り替える。

農薬は安全な場所に鍵をかけて保管する等、保管管理には十分注意すること。

農薬の誤飲を防ぐため、清涼飲料水の空容器などに移し替えない。

使用残りの農薬を不注意に廃棄したり、不用になった農薬を放置したりすると思わぬ事故を引き起こすことがあるので、その処理に当たっては関係法令を遵守して適正に行うこと。また散布に使用した器具及び容器を洗浄した水は、河川等に流さず、散布むらの調整等に使用すること。特に、種子消毒剤等農薬の廃液処理に当たっては、周辺環境に影響を与えないよう十分配慮した処理を行うこと。

農薬の空容器、空袋等の処理は、廃棄物処理業者に処理を委託する等により適切に行うこと。

7月の病害虫テレホン情報案内

(津 軽 地 域) 電 話 0172(53)0033

月	旬	水 稲	果 樹	畑作・野菜
7	上	ばか苗病の抜き取り	斑点落葉病とモモシンクイガの防除	
	中	葉いもちと稻こうじ病の防除	斑点落葉病の防除	すいか・メロンの病害虫防除
	下	葉いもちとコバネイナゴの防除	斑点落葉病とキンモンホソガの防除	にんじんの黒葉枯病防除

(南 部 地 域) 電 話 0176(24)0088

月	旬	水 稲	果 樹	畑作・野菜
7	上	7月病害虫発生予報について	7月病害虫発生予報について	7月病害虫発生予報について
	中	いもち病、稻こうじ病及びコバネイナゴの発生状況と防除	りんごの斑点落葉病とハダニ類の防除	キャベツのコナガの発生状況と防除
	下	いもち病とコバネイナゴの発生状況と防除	”	きゅうりとねぎの発生状況と防除

なお、テレフォン情報は、病害虫の発生状況により変更することがあります。

